

## [ 報 告 ]

## 死と葬儀をめぐる牧会

保科 隆

## はじめに

人間の死と教会の葬儀に対する関心をなぜ、いつ持つようになったのか。私としての二つ目の任地。北陸、富山県高岡の教会の牧師として過ごした約十年の間で特に強く関心を持つようになった。自分の関心は教会と日本という二つの問題に長年あり、現在も考え続けている。特に、日本人の死の理解については、高岡時代以後に自分の持っている死についての意識の中に古層とでも呼ぶべき変わらない核のようなものがあることに気付かされた。また高岡で、長年長老をして来た教会員の死と深く関わりあい魂の看取りとしての牧会をしながら、またその葬儀を行いながら考えさせられたことが多かった。

古典としての『記・紀』や、江戸時代の本居宣長、平田篤胤など国学者の書物、明治以後の近代の思想家としての、丸山眞男や加藤周一、柳田國男、宮本常一、折口信夫、武田祐吉、谷川健一など多くの人の書物との出会がこの間にあった。それらの著書から日本の文化や宗教、習俗の中には外からの思想、宗教によっては変化しない古層のようなものがあることについて多くのことを学んだ。日本の伝道の壁は何か。日本の伝道がなぜ進展しないのか。その理由はどこにあるのかなどを考えながら、日本伝道の課題を考えてきた。その伝道の課題の一つが死と葬儀をめぐる牧会の問題である。

## I. 日本人の死の理解について。

### ○志賀直哉の『和解』の中から

「特別の場合の他は墓の前でお辞儀をしない癖が自分にあった。それは十六七年前キリスト教を信じたころのある理屈から来た習慣だったが、墓の前を只ぶらぶら歩いているうちに、他の場所では到底それ程はできない近さと明瞭さで、その墓の下の人が自分の心裡に蘇ってくる。

自分は祖父の墓の前をしばらく歩いていた。そのうち祖父が自分の心裡に蘇ってきた。その祖父に対して自分には『今日祖母に合に行きたいと思うが』という相談するような気持が浮かんだ。『合に行ったらよかろう』とすぐその祖父答えた。自分の想像が祖父にそう答えさしたと言うにしてみればあまりに明らかに、あまりに自然に、直ぐそれが浮かんだ。それは夢の中で出会う人のように客観性を持っていて、自分には如何にも生きていた時の祖父らしかった。」

志賀直哉のこの文章から読みとれる日本人の死生観はどのようなものか。死者が生きているものに語りかけてくる。そのような存在として意識されている。しかも、その場所が墓地であることに注目すべきである。

また民俗学者の柳田國男に「魂の行くえ」という論文がある。その中で柳田は次のように書いている。「ひとりこういう中においてこの島々にのみ、死んでも死んでも同じ国土を離れず、しかも故郷の高みから、永く子孫の生業を見守り、その繁栄と勤勉を顧念しているものと考えたことは、いつの世の文化の所産であるかは知らず、限りもなく懐かしいことである。」つまり、柳田によれば日本では死者の魂は死後に遠いところにはいかない。生活した場所の近くの山に魂はとどまるとの発想である。このような考えとどのような対話ができるのだろうか。教会の牧会の現場でも問題になることである。

## II. 葬儀に対する二つの立場について。

### ① いわゆる福音派の教会と言われる人たちの律法的な立場。

「キリスト者は、キリストに従うことを何より大切にしなければならない。主は、私についてきなさいと招いたのち、まず行って、私の父を葬ることを許してください、とためらうその人に対して、死人たちに彼らの中の死人たちに葬らせなさい、と言わ

れた。(ルカ 9 章 59～60 節) 父を葬るという大切なことでさえ、主イエスに従うことを遅らせたり、曖昧にしたりすることの言い訳となつてはならないのである。その結果、村八分になるなら、それをうけるべきである。」井戸垣彰『この国で主に従う』からの引用。このような立場は非常に旗色鮮明にして明解で分かりやすい。しかし、律法的であることは否めない。福音派の教会には若い人々が多いことと律法的になることとは関連があるように思われる。

## ② カトリック教会の第二バチカン公会議以後の立場

「第二バチカン公会議の精神に従って、私達は日本人が古来から実践してきた、祖先を祭ることに深い宗教的感情や霊的感觉を発見し、それを評価しなければなりません。祖先崇拜は、根本的には日本人が先祖に対して抱いている愛と尊敬と家族の情緒的連帯感から発したものです。云々」『祖先と死者についてのカトリック信者の手引き』(カトリック中央協議会)。このような言葉で示されるようなカトリック教会の立場は福音派の人たちとの理解とは異なる。むしろ日本人の祖先崇拜を退けずに、その中に聖なる者があると考えている。キリスト論からでなく創造論にシフトして他の宗教について寛容な姿勢になる。我々はどちらの立場に立って死と葬儀を考えるのか。

## III. キリスト教の葬儀をどのようなものとして理解し、また実際に行うのか。

### ① 日本語の「葬る」の意味をめぐって

「葬る」は、「はぶる」と読み「追放する」の意味がある。つまり死の穢れを追放することが「葬る」ことの意味であった。死者を遠くへ追いやることが葬りであった。両墓制の問題はそこから出ている。

### ② どのような今日状況の中で。

葬儀業者の主導型、葬儀の無宗教化、お別れ会としての葬儀、密葬や家族葬の増加「千の風になって」の歌のような墓には私はいないとする死生観。

○教会は葬儀を礼拝の時として理解する。したがって、葬儀を礼拝として整える必要がある。整えるものとして葬儀の場所から始まり、会堂の飾り付けから、受付、弔辞の言葉の内容や献花その他のこともすべて含まれる。教会員の葬儀は基本的に教会ですることが原則である。なぜかといえば、葬儀を教会ですることによって人々を教

会へ足を一步でもむけさせることになるからである。教会に一番人の集まる機会は、なんといっても葬儀の場である。また、葬儀がある時には教会員の全員に連絡をする連絡網をつくる。しかし、福音派の方たちのように、どんな場合でも「ねばならない」ではない、柔軟な対応が必要。そして、遺体を教会堂に運んで葬儀を行うことを原則とする。特別な理由のない場合以外は、先に火葬にはしない。なぜならキリスト教では死を汚れとは理解していない。日本の古来からの両墓制などは、死を汚れと理解することや、魂を重視することにより、埋墓と詣墓の区別をする。そのような立場を教会はとらない。

#### IV. 教会の葬儀と牧会のまとめとして

◎葬儀は、教会にとって礼拝の時と同じように理解したい。したがって礼拝の場として整えられることが必要である。また、礼拝であるからこそ伝道の場でもある。しかし、実際にはこの世の中の常識や習慣でとりしきられる可能性が十分にあることを認識しておかねばならない。

◎日本人でありながらもキリスト者として生きる道があることを信じること。福音派の人々のように日本の宗教や習俗を一概に異教的と考えて退けない。日本の宗教についてある程度の理解と知識も必要である。しかし、またカトリック教会のように先祖崇拜でも「なんでもよし」でもない。キリスト者の自由の立場に立ちながら葬儀について考えていくことが大切である。

◎他宗教の葬儀に出席する場合は、遺族に対しても、また出席している他者に対する配慮も必要とする場合がある。自分のしていることが他者の信仰のつまずきとならないよう行動する。「信仰の弱い人を受け入れなさい」（ローマ 14 章 1 節）

◎葬儀の問題は結局、教会と教会に生きる個人の信仰告白の問題になる。この国にあってイエス、キリストをどのような方として信じるのかということ。その信仰の告白はただ紙に書かれたものとしてだけあるのでなく、信仰者の心に記され、また体をもってあらわされるものでもある。「信仰告白の公共性は次のことの中で一すなわち教会と世のただ中において、(略)信仰告白が言葉で語ることを、彼らの現実存在の中で表現し、まさにそのことでもって信仰告白者がいるということの中で一出来事となって起こる。」カール、バルト『教会教義学』Ⅱの三「聖書」から。